

回覧



値小だより

島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

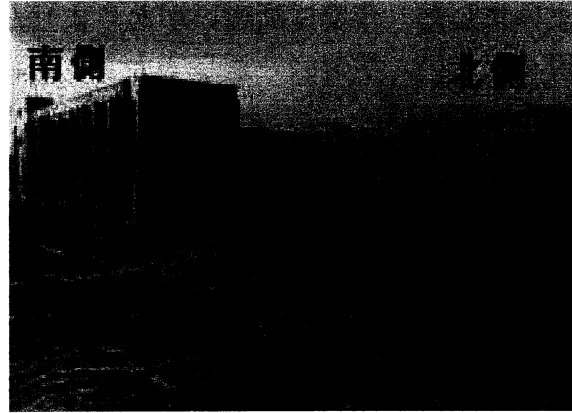
平成29年8月 9日 第10号

校長 酒井 元治

72回目の長崎原爆の日

ご存じのように今日8月9日は、長崎県にとって忘れられない日、72回目の長崎原爆の日です。長崎県下の小・中・高ほとんどの学校はこの日を登校日とし、平和教育を実施しています。72年前の今日、戦時下でありながら夏休みのひとときを過ごしていたであろう子どもたちの上に落とされたたった1発の原子爆弾。当時亡くなった人が7万4千人、その後、原爆の影響を受けてこれまでに亡くなった人は17万人を超えます。隣国のミサイル問題や核兵器禁止条約の報道が取りざたされる昨今、国という枠組みを越えた平和の在り方を考えさせられる72年目の長崎原爆の日です。

(原爆で焼けた山里小学校の校舎)



さて、今日の平和集会で私は、長崎市の山里小学校のことを紹介しました。山里小学校は、爆心地から700mのところにあった学校です。この日はもちろん夏休み。32名の先生方は、戦時下でろくに食べることもできない子どもたちのために米を作っている田んぼの草取りと、子どもたちの命を守るための防空壕を掘るグループに分かれ作業をされていたそうです。その最中に原爆が落とされました。32名中28名が亡くなり、夏休みを過ごしていた全校児童約1500名中約1300名の尊い命が奪われました。校区の家々はことごとく破壊され、被害を免れた家は1軒もなかったと聞きます。

そんな中、この学校の先生で奇跡的に助かった岩永衣伊子先生が当時のことを振り返り、平成22年11月に山里小学校の子どもたちに宛てた手紙があります。岩永先生はこの日、防空壕を掘る作業をされていました。今日はその一部を子どもたちに紹介しました。

その時、かすかな飛行機音が聞こえてきました。飛行機音にはみんな敏感になっていました。警報は空襲警報も警戒警報も解除中でした。友軍機かと思ったその瞬間、耳が破れんばかりの爆音に、とっさに掘りかけの壕に飛び込みました。奥まで届かない時点で、目が潰れるような閃光と熱風、火傷のような痛みとすごい耳の痛みに襲われました。敵か味方か見てくると言って崖を登って行かれた榊助教の先生の姿は、とうとう最後まで見つかることはできませんでした。

最初は学校が大きいと、直接弾を受けたかと思っていました。後で気がついたのですが、壕の入り口は爆心地方向の南を向いていて、掘りかけのため遮るものは何もなく、直接壕を爆風と熱風が襲ったのです。

壕の長さは3メートルくらいしかありませんが、中は真っ暗闇になりました。後から壕の中には、林、弓井先生と、私の3名しかいないことがわかりました。徐々に壕の中が明るくなり、林先生が恐る恐る外の様子を見られて、私たちに「しばらくは絶対に外に出ないように」と言いながら出て行かれました。人々の呻き声が聞こえてきました。弓井先生と入り口の所まで出て外の様子を見て我が目を疑いました。この世のものとは思われない光景に失神しそうになりました。近所の人々の大人や子供、学徒動員で働いていた県立高女や女子商業の生徒の皆さん、作業中だった同僚の先生方大勢が、運動場を横切り、防空壕までたどり着けないでみんなその場に伏せたのではないのでしょうか。

生きて苦しみもがいている人、すでに息絶えた人、一糸まとわず丸裸で倒れている人々。一人の女の先生は、10メートルくらいも吹き飛ばされ、崖に打ちつけられて即死の状態、しかも丸裸です。

体から何か垂れ下がっています。よく見るとそれは人の皮膚なのです。それらの人々が運動場一面にいっぱいいます。私は鳥肌が立ち、体がガタガタ震えました。

それから夕刻まで日直で職員室で助かれた吉浦アサ先生を加え、助かった4人の先生で、息絶え絶えに横たわり、髪は鳥の巣同然で顔も焼けただけ、誰が誰だか分からないほ



どに変わり果てた先生方を、名前を呼び確認しながら探し出し、壕の近くまで引きずるようにして運びましたが、つかんだ腕の皮膚がズルッとむけ、悲鳴をあげて痛がられました。「ごめんね、頑張っ！」と叫び、かわいそうで泣きながら作業をしました。あまりにも残酷でむごすぎる体験です。

ほどなくして田の雑草取りに行っていた古賀教頭先生はじめ女子先生方が今にも倒れそうにふらふらしながら帰って来られました。背中一面真っ赤に焼けた痛ましい姿に息をのみました。やっと一か所に集め終わった先生方は、「水を、水を」と振り絞るような声で懇願されます。水を探しに行きましたが、水道からは一滴の水も出ません。校外へも探しに出ましたが、爆風で吹き飛ばされて壊れた家々の材木が道をふさぎ積み重なり、道なき道の上を歩きました。靴ではなくわら草履をはいていた足に釘が刺さりましたが、気が張っていたのか、井戸を探すことで夢中だったのか、先生方の水を求められる苦しい顔が目につかび、その時は我を忘れて井戸を探しました。そこら中にも、真っ黒焦げで男の人か女の人か区別すらできない人や、内臓が飛び出ている5、6歳くらいの子供など、亡くなられた方々の死体がいっぱいです。

岩永先生の手紙はまだまだ続きます。岩永先生ご自身も、ご家族も原爆の後遺症に悩まされた人生だったことも記されていました。この悲惨さを語り継ぐ人が年々少なくなっていく中、しっかりと長崎県の子どもたちに語り継いでいくことは教育の重要な使命だと思います。

今日の平和集会では、6月21日にご講演いただいた小峰秀孝先生の被爆体験講話に対する感想発表も行いました。5・6年生分を紹介します。



6月21日にご講演いただいた小峰先生

ぼくは、戦争の話聞いて、平和の大切さを学びました。最初に、「本当でうそのような話」と言っていましたが、本当の話でした。日本には、すごい人がいるんだなと思いました。話を聞いて、ぼくも、親の愛情をもらって生きていけているんだなと実感しました。

また、被爆者だからといっていじめをしてはいけないと思いました。同じように、今もいじめをしてはいけません。そして、ぼくは、いじめにあっても「死にたい」なんて絶対に思いません。

5年 遠山 琉伊

6年 岩坪 果恋

私は、被爆者の方のお話を聞いて、私たちにとっては本当に考えられないことばかりだなあと思いました。けがをして血を流しながら学校に行くこともありえないと思ったけど、本当にあったことだからすごく辛かったらうと思いました。

また、被爆者だからといって避けられたり、仕事をさせてもらえなかったりするということも、とてもひどいことだと思いました。そして、辛い目にあって苦労してきて、でもそれなのに一生懸命生きている人たちは本当にすごいなあと思いました。

私は、今回聞いたことをしっかり心にとめて、原爆の恐ろしさと、戦争は絶対にあってはいけないということ、そして平和であることのありがたさと大切さを忘れないようにしていきたいです。

夏休みの宿題の追い込みは、 大学生のお兄ちゃんやお姉ちゃんぞ！

7月の学校日よりではたいへん失礼しました。大学生と電話やメールで打ち合わせをしていたのですが、1ヶ月の勘違いという大変な凡ミスをおかしてしまいました。今度は間違いがありませんので、夏休みの宿題の追い込みにご活用ください。学習会を通じて大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんと触れあわせてみてください。

日時 8月23日(水) 8:30~10:00

場所 小値賀小学校図書室

対象 全学年

長崎県立大学の学生さん10名程度が小学生の夏休みの宿題をお手伝いします。(答えは教えません。解き方を教えます。)

持参するもの 筆記用具 夏休みの宿題、他

